

三原のお宝 歳出しニユース

— 第 60 号 —

お祝いの贈り物 つのだる 角樽



高さがあるもの、幅があるものと色々なつのだる角樽があります。
中央の柱には「寿」と書かれています。

写真のようなさかだる酒樽を、どこかで見かけたことはないでしょうか。これは、長く伸びたえ柄の部分が見えることから「つのだる角樽」と呼ばれます。

角樽は、江戸時代から使われており、こんれい婚礼、新しい家ができた時のむねあ棟上げ、お祭りといったお祝いの時に贈られるものでした。その他、たんじょう誕生祝いやお店の開店・そうぎょうきねん創業記念で贈られることもあり、様々なおめでたい場面で使われます。

赤や黒のうるし漆で塗られているものが多く、かもん家紋ややごう屋号を入れることもあります。ふたに開けた穴に大きな柱を差していて、飲む時にはそこに注ぎ口をはめ込みます。元々は木製でしたが、最近ではてがる手軽なプラスチック製もあります。

おめでたい時の贈り物なので、入れるお酒の量も、えんぎ縁起がいいごろ合わせにしているものがよく使われました。例えば、婚礼の贈り物では「いっしょうつ一生連れ添う」から一升（約 1,800ml）入り、商売をしている家には「はんじょう商売はんじょう繁盛」から半升（約 900ml）入りの角樽が使われました。

四角い樽 さしだる 指樽

たる樽の形として多いのは円筒形です。表面で紹介した角樽も、下がすぼまった円筒形をしています。

ところが、資料館には四角い樽があります。これは「指さし樽」と呼ばれ、主にこんれい婚礼の贈り物として使われました。また、花見に持って行ったことから「花見樽」、着物の袖はなみだるに似ていることから「袖樽」と呼ばれることもあります。

指樽は今から約 600 年前の室町時代から使われ始めたとされています。しかし、江戸時代後期に、円筒型の樽が主に使われるようになり、指樽はだんだんと使われなくなりました。現在では、見かけることが少ない珍しい道具です。

元々は二つ一組で使うものですが、資料館にはそのうちの1つが収しゅうぞう蔵されています。修理して色を塗り直した所があるので、長年ながねんにわたって大切に使われてきたことが想像できます。

ご来館の際には、歴史を感じることができる貴重な樽をぜひご覧ください！



上に飛び出しているのは、樽のたる栓せんです。栓も含めた高さは、約45cmになります。



栓と注ぎ口の作りはこのようになっています。一升のお酒を入れることができます。

緊急事態宣言解除に伴い、10月1日から開館します。

(開館時間 9時30分～17時)

<https://www.city.mihara.hiroshima.jp/site/kyouiku/103968.html>

《編集後記》

お酒シリーズ第3回は樽がテーマです。

今では木製の樽は珍しくなりましたが、陶器やプラスチックとは違ったぬくもりが感じられると思います。ぜひ資料館でご覧ください。(み)

三原市歴史民俗資料館
三原市円一町 2-3-2
TEL0848-62-5595
令和3年10月1日発行

